



# 第44回土門拳賞受賞作品展 小柴一良

↑ 松田富次 1949年湯堂生まれ 視界ゼロの富次は不知火海に向かって、何かに折っているように見えた 水俣市明水園の外庭 2008年8月  
↓ 親水公園 湯堂茂道方面を見る 2011年5月



2025年10月31日(金)  
2026年1月25日(日)

12月-1月は月曜休館 ※1月12日(月・祝)は開館、翌1月13日(火)休館  
年末年始休館 12月29日(月)-1月3日(土)  
開館時間 9:00-17:00 ※入館は16:30まで  
入館料 一般900円 / 高校生450円 / 中学生以下無料  
TEL 0234-31-0028 www.domonken-kinenkan.jp

# 水

THE 44TH  
KEN DOMON AWARD  
EXHIBITION

# 俣

MINAMATA STORY  
1971-2024

# 物

KAZUYOSHI  
KOSHIBA

# 語

2025.10.31 <sup>FRI</sup> — 2026.1.25 <sup>SUN</sup>

# 縄文 ⇔ 現代

# JOMON, MODERN, KEN DOMON



《司葉子さんと壺輪》1964年

同時開催 / 第44回土門拳賞受賞作品展  
小柴一良「水俣物語 MINAMATA STORY 1971-2024」

12月-1月は月曜休館 ※1月12日(月・祝)は開館、翌1月13日(火)休館  
年末年始休館 12月29日(月)-1月3日(土)  
開館時間 9:00-17:00 ※入館は16:30まで  
入館料 一般900円 / 高校生450円 / 中学生以下無料  
TEL 0234-31-0028 WWW.DOMONKEN-KINENKAN.JP

千年前の人間が  
想像も出来なかった今日  
千年後の人間が  
撮りたくても撮れない今日



受賞のことば

写真家・小柴一良

今から50年ほど前、私は土門先生を背中におぶって室生寺・鎧（よろい）坂を上っていた。2度の病で倒れ、車いすに頼りながらも奈良・京都の撮影を続けておられた。撮影には十数人のスタッフが集められた。私たち孫弟子はカメラ回りではなく、車の運転、車いすの介助などの肉体労働要員だった。独特の「土門流言葉遣い」や撮影方法は興味深いものだった。

当時写真家を目指す私たち団塊の世代は、「ベトナム戦争」「水俣」は避けて通れないモチーフだった。大阪でのスタジオ助手を辞め、写真家として独立した。両親をはじめ、友人、知人には反対されたが、1974年に水俣に向かった。住まいも現地に移し、撮影を続けた。しかし、数年たつうちに、段々と撮れなくなった。前年の熊本裁判の後で、「もうそつとしておいてほしい……」という水俣の人たちの声が胸に響き、悩んだ。

6年間「水俣病事件」の現場に身を置きながら、納得できる写真は撮れなかった。写真を発表することなく、現地を離れた。

2006年、写真家の桑原史成氏から水俣をテーマにした現地での写真展への参加を求められた。当初は断っていたが、自分の写真でよかったらと思ひ直し、出展を決めた。

28年ぶりに会った水俣の人たちは、私のことを忘れずにいた。時が経過し、人も街も変わっていた。「今の水俣を撮りたい」。撮影を再開した。

土門拳賞を頂いたことによってこれまで迷惑をかけた人たち、被写体になってくれた方々に少しは恩返しできたかもしれないと思う。

第44回土門拳賞（毎日新聞社主催）を受賞した小柴一良氏の写真集『水俣物語 MINAMATA STORY 1971-2024』は、半世紀以上にわたり胎児性・小児性患者らの自宅や病院での日々を撮影し、その生き様を捉えたモノクローム作品です。その中には時代とともに変遷する熊本県水俣市、鹿児島県出水市などの情景も収められました。公害問題を記録し続け、社会に示した作者の意志が高く評価され、今回の受賞に至りました。

- 1 長井勇 肥薩県境 2007年11月
- 2 松田富次 明水園の外庭で 2008年8月
- 3 丸島漁港（魚市場）水俣市 2021年12月
- 4 金子雄二 水俣病慰霊祭 2025年5月
- 5 水俣第2小学校 2025年5月



KAZUYOSHI KOSHIBA



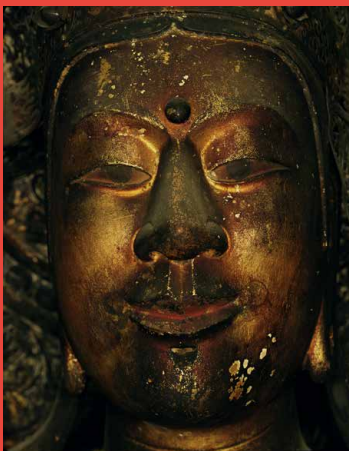
小柴一良（こしば かずよし）／1948年、大阪府生まれ。大学卒業後、72年から大阪の西川孟写真事務所で撮影助手として働く。その時代に土門拳の「古寺巡礼」などの助手も行う。74年に写真家として独立し、水俣病の取材を始め、79年まで現地で暮らす。その後、大阪を拠点に、主に広告写真を撮影する。2007年、水俣で開催された写真展「水俣を見た7人の写真家たち」に参加したことをきっかけに水俣取材を再開し、撮影を続けている。

第44回土門拳賞受賞者  
小柴一良氏による講演会  
2025年11月1日（土）  
14時／要予約・要入館料

※詳細はお問い合わせください



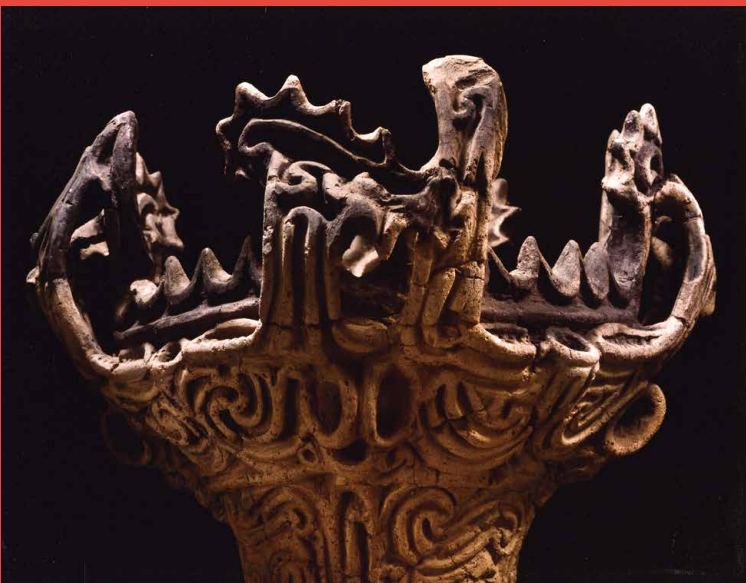
1 《岡本太郎》1954年



4 《法隆寺東院夢殿観音菩薩立像（救世観音）面相》1960年

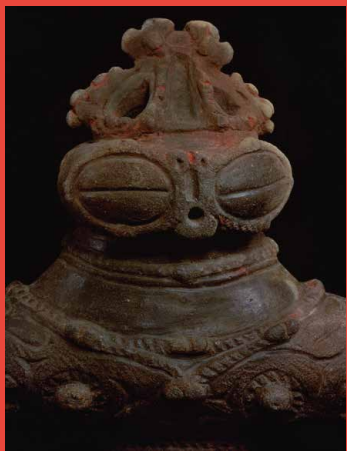


3 《長谷川町子》1949年

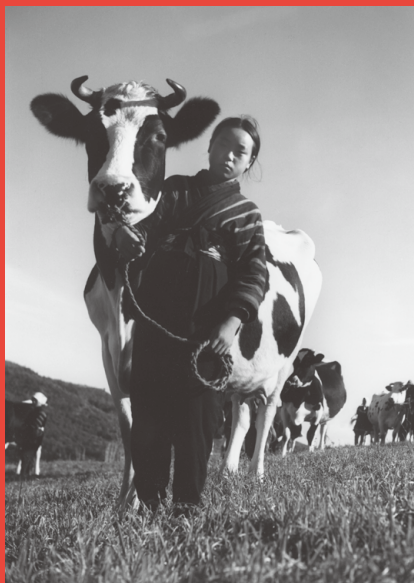


6 《縄文中期火焔土器（上部）》1963年頃

旧制中学校に通っていた17歳の頃、土門拳は考古学に熱心していました。書物で知識を得るだけでは飽き足らなかった土門は、学校の周辺に点在していた古墳を独自に調査したり、弥生中期のものと思われる甕を発掘したりするなど、“考古学マニア”ぶりを発揮していたようです。卒業後には考古学研究の職を志したこともあったものの、紆余曲折を経て最終的に写真家の道に進んだ土門ですが、古寺の仏像から現代の社会問題まで被写体を徹底的に研究し撮影していく姿勢には、少年期から一貫していた彼の並外れた探究心が表れていたといえます。そのような仕事を通じ、土門は日本という国に流れる歴史を社会的・文化的な視点から見つめ、表現し続けました。本展では、彼の探究心の原点ともいえる原始－古代から現代に至るまで、土門が撮った多様な被写体を歴史の流れを辿る形に再構成し、土門が追い求めた「日本」の姿を探ります。



2 《縄文時代晩期の土偶頭部》1963年頃



5 《農村 酪農 青森県戸来村》1941年

●学芸員によるほほ月イチギャラリートーク  
11月8日（土）、1月17日（土）  
いずれも14:00～/要予約・要入館料

●拳湖のカメラ・オブスクラ  
2025年10月31日（金）－2026年1月25日（日）  
カメラ・オブスクラ仕組み解説トーク  
11月15日（土）、12月20日（土）、1月10日（土）  
各日①11:00－/②14:00－の2回開催/要予約・要入館料

●関連イベント／いずれも要入館料  
特別講演会「形から進化を読み解く 恐竜研究の最前線!」  
11月3日（月・祝）10:00－11:30/要予約  
出演：真鍋真氏（古生物学者・恐竜学者／国立科学博物館 名誉研究員、群馬県立自然史博物館 特別館長）  
一般公募写真展 第20回「わたしのこの一枚」写真展  
10月31日（金）－11月14日（金）  
畠山秀樹フラワーアート「水のいない花 ZERO FLOWER」  
11月6日（金）－11月30日（日）



受賞のことば

写真家・小柴一良

今から50年ほど前、私は土門先生を背中におぶって室生寺・鎧（よろい）坂を上っていた。2度の病で倒れ、車いすに頼りながらも奈良・京都の撮影を続けておられた。撮影には十数人のスタッフが集められた。私たち孫弟子はカメラ回りではなく、車の運転、車いすの介助などの肉体労働要員だった。独特の「土門流言葉遣い」や撮影方法は興味深いものだった。

当時写真家を目指す私たち団塊の世代は、「ベトナム戦争」「水俣」は避けて通れないモチーフだった。大阪でのスタジオ助手を辞め、写真家として独立した。両親をはじめ、友人、知人には反対されたが、1974年に水俣に向かった。住まいも現地に移し、撮影を続けた。しかし、数年たつうちに、段々と撮れなくなった。前年の熊本裁判の後で、「もうそつとしておいてほしい……」という水俣の人たちの声が胸に響き、悩んだ。

6年間「水俣病事件」の現場に身を置きながら、納得できる写真は撮れなかった。写真を発表することなく、現地を離れた。

2006年、写真家の桑原史成氏から水俣をテーマにした現地での写真展への参加を求められた。当初は断っていたが、自分の写真でよかったらと思ひ直し、出展を決めた。

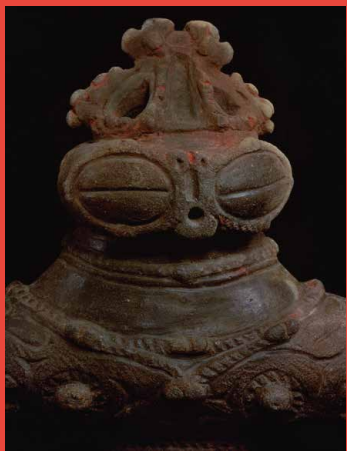
28年ぶりに会った水俣の人たちは、私のことを忘れずにいた。時が経過し、人も街も変わっていた。「今の水俣を撮りたい」。撮影を再開した。

土門拳賞を頂いたことによってこれまで迷惑をかけた人たち、被写体になってくれた方々に少しは恩返しできたかもしれないと思う。



1 《岡本太郎》1954年

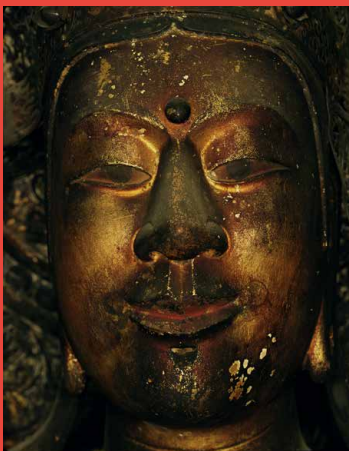
旧制中学校に通っていた17歳の頃、土門拳は考古学に熱中していました。書物で知識を得るだけでは飽き足らなかった土門は、学校の周辺に点在していた古墳を独自に調査したり、弥生中期のものと思われる甕を発掘したりするなど、“考古学マニア”ぶりを発揮していたようです。卒業後には考古学研究の職を志したこともあったものの、紆余曲折を経て最終的に写真家の道に進んだ土門ですが、古寺の仏像から現代の社会問題まで被写体を徹底的に研究し撮影していく姿勢には、少年期から一貫していた彼の並外れた探究心が表れていたといえます。そのような仕事を通じ、土門は日本という国に流れる歴史を社会的・文化的な視点から見つめ、表現し続けました。本展では、彼の探究心の原点ともいえる原始―古代から現代に至るまで、土門が撮った多様な被写体を歴史の流れを辿る形に再構成し、土門が追い求めた「日本」の姿を探ります。



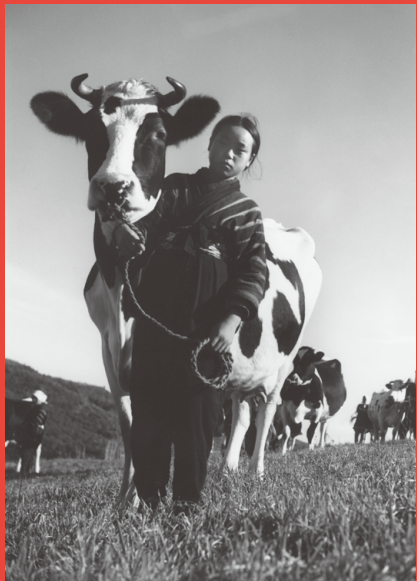
2 《縄文時代晩期の土偶頭部》1963年頃



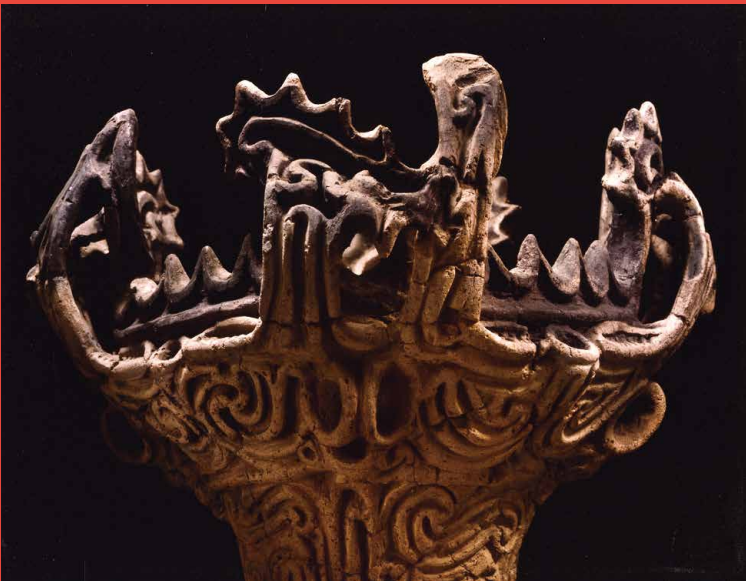
3 《長谷川町子》1949年



4 《法隆寺東院夢殿観音菩薩立像（救世観音）面相》1960年



5 《農村 酪農 青森県戸来村》1941年



6 《縄文中期火焔土器（上部）》1963年頃

●学芸員によるほほ月イチギャラリートーク  
11月8日(土)、1月17日(土)  
いずれも14:00~/要予約・要入館料

●拳湖のカメラ・オブスクラ  
2025年10月31日(金)―2026年1月25日(日)  
カメラ・オブスクラ仕組み解説トーク  
11月15日(土)、12月20日(土)、1月10日(土)  
各日①11:00―/②14:00―の2回開催/要予約・要入館料

●関連イベント/いずれも要入館料

特別講演会「形から進化を読み解く 恐竜研究の最前線!」  
11月3日(月・祝)10:00―11:30/要予約  
出演：真鍋真氏(古生物学者・恐竜学者/  
国立科学博物館 名誉研究員、群馬県立自然史博物館特別館長)  
一般公募写真展 第20回「わたしのこの一枚」写真展  
10月31日(金)―11月14日(金)  
畠山秀樹フラワーアート「水のいない花 ZERO FLOWER」  
11月6日(金)―11月30日(日)

※詳細はお問い合わせください

## 第44回土門拳賞受賞作品展

## 小柴一良

KAZUYOSHI  
KOSHIBA

小柴一良（こしば かずよし）／1948年、大阪府生まれ。大学卒業後、72年から大阪の西川孟写真事務所で撮影助手として働く。その時代に土門拳の「古寺巡礼」などの助手も行う。74年に写真家として独立し、水俣病の取材を始め、79年まで現地で暮らす。その後、大阪を拠点に、主に広告写真を撮影する。2007年、水俣で開催された写真展「水俣を見た7人の写真家たち」に参加したことをきっかけに水俣取材を再開し、撮影を続けている。



1



2



3



4



5

第44回土門拳賞（毎日新聞社主催）を受賞した小柴一良氏の写真集『水俣物語 MINAMATA STORY 1971-2024』は、半世紀以上にわたり胎児性・小児性患者らの自宅や病院での日々を撮影し、その生き様を捉えたモノクローム作品です。その中には時代とともに変遷する熊本県水俣市、鹿児島県出水市などの情景も収められました。公害問題を記録し続け、社会に示した作者の意志が高く評価され、今回の受賞に至りました。

- 1 長井勇 肥薩県境 2007年11月
- 2 松田富次 明水園の外庭で 2008年8月
- 3 丸島漁港（魚市場）水俣市 2021年12月
- 4 金子雄二 水俣病慰霊祭 2025年5月
- 5 水俣第2小学校 2025年5月



6